

## 志摩の島々のいま

## 渡鹿野島篇

三木 剛志

古代から文字通り「へしま」の国であ

った志摩地方には、現在二つの離島振興法指定有人離島がある。的矢湾奥に位置し、近世には大坂と江戸を結ぶ廻船の風待ち港として繁栄した渡鹿野島は、船宿や遊郭、戦後の歓楽街だった時代を経て、健全な観光立島に向けてその将来像を模索している。英虞湾のほぼ中央に位置し、かつては真珠養殖の一大拠点として名を馳せた間崎島では、生活支援や観光面で新たな動きが生まれてきている。今回は、それぞれの島で活動されている方々から経緯と現状、展望と抱える課題などについてお話をうかがった。今号グラビアと、連載「島の精神文化誌」もあわせて参照いた

だきたい（現状は令和四年七月の取材時）。

## 観光立島に向けた取り組み

茶呑潤造さん（七十二歳）は、中学校卒業後に島を離れ、横須賀市にある陸上自衛隊少年工科学校卒業後、自衛官として勤務し、家業の商店を継ぐために三〇歳で帰島、平成一八年からうち二年間を除いて渡鹿野区長を務めている。いま、島の実人口は八六世帯一六〇人、その多くが独居の高齢者。若い人はほとんどが島外に居を構え、島での仕事も通いをするようになり、二世帯同居の家庭はないという。「自分が小さい頃、昭和三十年代は釣り客が多く、親父も釣り船を出してい

た。一回出せば、一万円くらいにはなっていた。風俗が盛んな時期には少なくなつたが、近年また釣りブームで増えてきた」

海に囲まれているながら専業の漁業者はおらず、他業種と兼業で数軒が沿岸漁業やカキ養殖などを営んでいる。

「これまで観光で生きてきた島。仕事としては観光しかない。お客さんがどんどん来て楽しめる島にしていきたい。そのための売り物はやはり「自然」だが、それだけでは……」

渡鹿野の観光ポイントとしては、まづ白砂の海水浴場「パールビーチ」が挙げられる。旧磯部町時代、家族で楽しめる健全な観光地づくりに向け、国庫補助による県の高潮対策海浜改修工事の一環で港湾施設とあわせて総工費約一〇億円をかけて整備された。スペイン風の休憩所を備え、ペット専用スペースも設けられている。

そして、島の北東部にある標高二五



渡鹿野島の至近にある居森島。



渡鹿野区長を務める茶呑潤造さん。開発総合センター内にある区の事務所にて。

メートルほどの「わたかの園地」から眺める的矢湾の景色。天候次第では富士山も見えるという。

もう一つは「ハクササン」。島北部の湾内に居森島いもりと呼ばれる小島があり、その祠に祀られている居森大明神の俗称で、歯の病気や痛みに霊験あらたかといわれ、お参りして願いが叶うと鉄板や木綿針でつくった鳥居を奉納してきた。

「全国的にも珍しく、観光資源としても貴重だが、島だから歩いて行けない。今年、土地の所有者から許可をもらって、居森島の対岸に至る道を再整備した。そこから島へは距離もわずかで、イカダで渡れるようにしようかという話になっている」

渡鹿野が生き残るには、何か仕事がないといけない。若い人たちが自由に行き来できる島にしたい。

「地域おこし協力隊に来てもらったのは、何か仕事をつくってくれるのではという期待から。彼（峠広之さん、後出）は、自分でプログラムを組んだりパソコンを使いこなせるし、インストラクター資格もとってウォータースポーツの事業にとりかかってくれている」

区は、島内の市の施設——区の事務所が置かれている開発総合センター、災害時の避難所にもなっているコミュニティ公園、パールビーチ——の指定管理者となっている。それに加え、島

内の浄化槽の汲み取りも区の事業となっており、課題はそれらの管理運営を担う区長の後継者だという。

### 体験メニューの提供や

### 情報発信を担う協力隊員

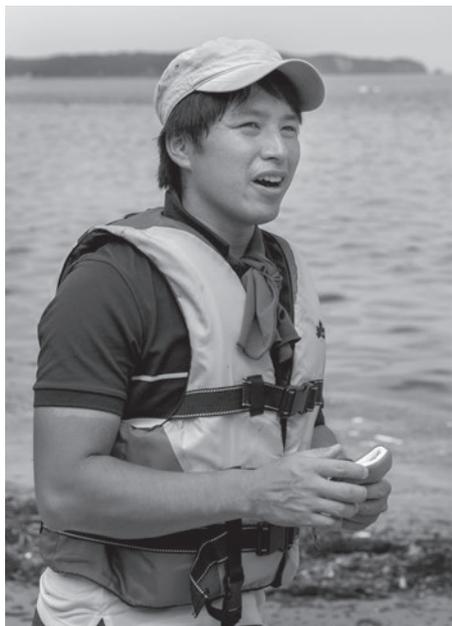
今年、三年ぶりに復活した天王祭で、神輿巡行の先頭に立つ提灯役と夜の音楽祭の進行役を務めた志摩市の地域おこし協力隊員の峠広之さん（三一歳）は、石川県小松市の出身。大阪の大学を卒業後、大阪府の小学校講師として採用された。低学年の担任を受け持った年以前患った潰瘍性大腸炎が再発してしまい、次年度の勤務が困難になった。新型コロナウイルス感染拡大の最中、都会での生活に疑問を感じていたこともあり、環境を変えるなら以前からよく訪れていた志摩にしようと思った。協力隊員には大学の頃から興味があり、移住マッチングサービス「SMOUT」で検索したところ、渡鹿野島の隊員募

集がヒットした。志摩市に「ぜひ島を見せしてほしい」と連絡、島では区長などに島内を案内してもらった。

「風俗街だった歴史もよく知らず、何の先入観もなく入れた。適度な田舎、しかも島というところがよかった」

採用面接にも無事合格し、令和三年四月、島の活性化を図る任務で赴任することとなった。

まず、負のイメージに塗れたネット情報に埋もれている状況を改善するため、住民の方と一緒に自らのスキルを生かして島のホームページを作成、SNSによる情報発信と誘客活動を開始した。しかし、フォロワーも思うように伸びなかったため、HPは専門家の協力を得てSEO（検索で上位に表示されるよう最適化）対策を講じ、SNSはスポーツなどを通じて地域振興を図る団体（一社）志摩アドベンチャーコンサルタンツ（AC志摩、磯部町六川）と連携して情報発信するようにした。



志摩市の地域おこし協力隊員の峠広之さん。

一年目は、来島者への観光案内などをしてきたが、「居森島を間近で見せたい」との思いが強くなった。ちょうど、ACC志摩代表の瀬古恵次郎さんから、一緒にSUP（スタンドアップパドルボード）をやらないか、との話があり、日本SUP指導者協会のインストラクター資格を取得し、今夏から事業を開始した。

「SUPは美容と健康にも役立つ。クル

ーディングではパールビーチを基点に、途中で遊女にまつわる「仏石」の案内もしながら、居森島へ行ったりしている」

料金は九〇分のガイドコース七五〇円（市民六〇〇円）、レンタルのみなら九〇分で四四〇円。情報発信の成果か、八月にはタイからの観光客一人が来島、英語でのSUPクルーズを予定している。八月末には、「自分たちの地域おこしを考える」をテーマに、志



今年の天王祭で立てた竹あかり。

摩市のジュニアリーダー研修で十数人を受け入れ、SUPや竹あかりづくり、ごみ拾いなどを体験してもらおうという。峠さんはシーカヤックのインストラクター資格も取得し、今年から個人的に（一社）志摩ネイチャー倶楽部が運営する志摩自然学校（大王町波切）でツアーガイドを始めた。また、島の高齢者の見回り支援も兼ねて、ケガをした人の代わりに毎朝新聞配達をし、ビー



福寿荘の代表取締役を務める木村圭仁朗さん。

チや園地、開発総合センター前などの草刈りも行なっている。将来的には、島でワーキングスペースとゲストハウスの運営を考えている。

「島で空き家を改修しようとする、材料搬入の船代などが嵩み、本土側の一・五倍くらいの費用がかかる。自立に向けて、いまから貯金して備えたい」

去年から取り組んでいる「竹あかり」づくりでは、太くてまっすぐな島の孟宗竹を活用している。令和二年にはじ

まった「みんなの想火<sup>そまか</sup>」プロジェクト  
【※1】のメンバーにもなった。九月一八日の世界平和を願って各地で一斉にあかりを灯す「世界最大の竹あかりの祭典」では、島に二〇本の竹タワーを立て、星空観察と組み合わせたいベントを開催するという。

### 渡鹿野観光のあゆみ

木村圭仁朗さん（八〇歳）は、地元の志摩高校を卒業後、父親が昭和七年に創業した福寿荘に入社、同五六年には代表取締役就任した。増改築によって徐々に規模を拡大、現在は六六室を擁する福寿荘をはじめ、高級指向の別館「はいふう」（二六室）、パールビーチに面した「海辺のホテルはな」（三〇室）を併設、約八〇人の従業員を雇用する渡鹿野島最大の宿泊事業者となっている。「はいふう」は、廃業した隣接旅館を競売で取得して改装、平成一六年に新規開業した。「はな」は、東日本大震災

の被災者宿泊支援施設としても活用するため、経営破綻したホテルを買い取り、同二四年にオープン。大学のサークルやスポーツ合宿などにも活用されている。

「昭和三二年の売春防止法施行で島から遊郭がなくなった。一〇年ほど経って風俗事業者が入ってきたが、独特の歴史背景もあったためか排除することなく、いつの間にか島と同化していた」

木村さんは、平成に入った頃からこの島の旅館組合長と観光協議会長を長く務め、暴力団・薬物・未成年を排除し、犯罪のない観光地とすべくたたかってきた、と語る。

「警察から腕章をもらって私たちが防犯パトロールをするなどしていた」

昭和六二年制定のリゾート法（総合保養地域整備法）の適用第一号となった三重県の「三重サンベルトゾーン構想」で、渡鹿野島は離島の特性を生かした長期滞在型保養地としての位置づけが

なされ、「アイルランドテラピー構想」が練られていたという。この機に木村さんは温泉開発を呼びかけたが、結局は独自に掘削して平成九年に塩化物泉を開湯、同一一年には伊勢志摩最大規模の露天風呂「風待ちの港」を開設している。

近年、温泉地を中心とした多業種連携を目指す環境省の取り組み「チーム新・湯治」にも「風待ちの湯福寿荘渡鹿野旅館組合」として登録した。島内の宿泊施設に長期滞在し、ここの温泉を湯治に活用してもらおうプランである。「温泉掘削がもう一〇年早ければ、これほど廃墟が増えていなかったかもしれない」

木村さんはそれ以前から温泉の必要性を痛感していたが、当時は島内の別のホテルが所有する泉源があり、既存源泉から一定の距離内は新たな掘削を認めない規制に阻まれていたという。

平成二四年には、渡鹿野区・旅館組

合・観光協議会で、「活性化推進委員会」を組織し、県の支援事業の一環で四日市大学の学生と協働。上空からみた島の形から「ハートアイルランド」のイメージで情報を発信、カップルが島内で散策を楽しむイベントを数年間にわたる企画・実施した。翌二五年には観光協議会が市や警察とも連携、風俗産業のイメージを払拭し、健全な観光地に向けて「安全安心街づくり」を宣言している。

#### ポストコロナを見据えた交流づくり

こうした関係者の努力が奏功した象徴例が、修学旅行生の受け入れだ。関係団体などと一緒になった誘致活動の結果、令和三年一〇月に大阪の府立高校生一三〇人がはじめて来島した。新型コロナウイルスの影響で行き先を再考する学校が増えるなか、渡鹿野島は伊勢神宮をはじめ志摩スペイン村、シーカヤックや釣り、真珠加工体験など、伊

勢志摩の自然環境や歴史文化、観光資源と組み合わせた行程に見合う宿泊地として最適だった。離島とはいえ、対岸本土から渡船でわずか三分というアクセスの良さもある。それ以降、一〇を超す小中高校が訪島、福寿荘に宿泊している。なかには、すでに次回の予約を済ませた学校もあり、あらためて家族と一緒に泊まりに来てくれた大阪からの修学旅行生もいたという。

同時期、「オノコロハートアイルランド」として「恋人の聖地」【※2】の選定を受け、今年度、旅館組合が県から「魅力的な観光地づくり補助金」を受けてパールビーチにハートのミニユメントを設置する。また、漁業用の浮きとして使われていたガラスの瓶玉に電飾を施してパールビーチの周辺に設置しており、これをさらに延長してフォトジェニックな遊歩道とし、景観保全と暴風対策を兼ねてヤシも植栽、誘客につなげるという。

「中部地方や関西からのリピーターの方が多い。はとバスなど関東からのツアーも、ここで二泊しての伊勢志摩めぐりなどが好評。とくに女性客が多い。」

いまは、三重県内での宿泊・日帰り旅行が割引となるクーポンを利用する方々が増えているという。

今年度、観光の基盤づくりとして、福寿荘が主体となって観光庁の助成事業「※3」に応募、持続可能なマリンアクティビティと「温故創新」をテーマとした事業が採択されている。

本事業には志摩市も連携、福寿荘から委託を受けた事業者の協力で、SUPとSUPヨガをはじめ、島での滞在時間増に向けて「ワーケーション」「星空観測」「ウェディング」「釣り」といったプログラムが想定されている。「コロナ対策で金融支援は必須。ゼロ金利で返済は二、三年据え置きだが、返済が始まると大変なことになる。状況が回復するまで延長してほしい」

福寿荘では近年、

施設内の重油ボイラーを電気式ヒートポンプに変え、

空調設備も省エネ型に更新するなど、

環境省の補助事業

を活用しながら設備投資も進めている。

また、小型の

中古フェリーを導入し、独自の物流

に活用するなどし

ている。バスの運転手や添乗員用の小部屋（二室）を改装してビジネス用途

の仕事部屋とし、廊下を挟んだ海側の部屋で宿泊してもらうなど、ワーケーションプランの導入も考えている、と

いう。「ポストコロナを見据えた観光庁の補助事業「※4」が今年度までと聞いているが、どこの観光地もコロナ禍で疲弊



福寿荘の本館。

しており、攻めの気持ちが出てくるまであと五年間は延長、補助率や補助上限額についても再考してもらいたい」島内には廃業したホテルなどの廃屋が目につく。もしこの事業による補助を受けてこれらを撤去し、跡地に公園や外湯などを整備できれば、ワーケーションの利用促進にもつながる。除却費用の地元負担分は、入湯税の超過課



波鹿野島随一の観光ポイント、白砂の海水浴場パールビーチ。

税分を観光財源とし、その一部を充てることもできるのではないかと木村さんは語る。（次号、間崎島篇につづく）

（日本離島センター調査研究部長）

※写真はすべて小原佐和子

※1…「自分たちのまちは、自分たちが灯す」を合言葉に全国一斉に「竹あかり」を灯し、「和の精神」で世界へ希望のメッセージを伝えるプロジェクト。  
※2…「観光地域の広域連携」を目的としたNPO法人地域活性化支援センターの「恋人の聖地プロジェクト」により、全国の観光地域の中からプロポーズにふさわしいロマンティックなスポットを平成一八年から選定（後援：観光庁、JTB）。令和四年九月現在、全国一三六カ所が選定されている。



※3…「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業」。地域の関係者が連携して実施する地域ならではの観光資源を活用したコンテンツの造成から販路開拓（ツアー・旅行商品等の企画・開発費・モデルツアー実施費・プロモーション費等）まで一貫した支援を実施する補助事業。

※4…「地域一体となった観光地の再生・観光サードピスの高付加価値化事業」。長引く新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けた観光地がポストコロナの反転攻勢につなげるため、地域一体となって取り組む高付加価値化等を支援。地域計画に基づく事業支援メニューの一つに「観光地の景観改善等に資する廃屋の撤去支援」（補助上限一億円、補助率二分の一）がある。